

〔翻訳〕

ヘンデルのオラトリオと18世紀思想（その12）

ルース・スミス 著

赤井 勝哉[†] 訳

第6章 キリスト教の擁護

汝ら理神論者よ、かの使徒を汝らは聞くことができるのか、
感謝の耳を持たずして？

——トマス・モレール『キリスト者の凱歌』（1743年）

懷疑主義の広がり

18世紀のイングランド教会の教えは、信仰よりも善行を強調していた。自由主義的なティロットスン主教や配下の聖職者たち、およびその信奉者たちによってなされた当時の無数の説教においては、倫理に適った社会的な慈善行為は救いに到る道とされている。このように原罪の概念を蔑ろにし、人間には現世において聖なる戒律の要求を満たす能力が具わっている点を強調することによってキリスト教会は、恵みによる救済という教義を、それまでのイングランド史上のどの時期よりも弛めてしまったのである。ある種の宗教解釈——最も影響力を持ったものとしては第3代シャフツベリー伯爵によるものがある——のなかには、男にも女にも完全を教えるための神など必要ないと仄めかすほどまでに道徳を世俗化したものもあった。⁽¹⁾ 同じ頃にフランスではリシャル・シモンが聖書本文の学術的批評を創始し、彼の作品の英訳（『旧約聖書の批評史』、1682年）は、聖書が無謬

[†] AKAI, Peter Katsuya 四国学院大学文学部教授

であること、神の靈感を受けて書かれたものであること、権威ある書物であることに対するイングランドのプロテスタントの信仰を著しく蝕んだ。これらは自由思想であった理神論の運動の、イングランドにおける知的温床となった。⁽²⁾

宗教史にとってイングランドの理神論論争が持つ最も重要な意味は、この論争によって18世紀イングランド教会の主要な護教論が生み出されたことである。理神論論争がヘンデルのオラトリオを研究する者にとって重要なのは、台本の内容を説明するのに役立ち、台本と同時代の主要な関心事との関わりの強さを深く認識させてくれる点である。イングランドにおける「理神論の父」チャーベリーのロード・ハーバートが『真理論』⁽³⁾を^{デ・ウェリタテ}発表したのは1624年のことであったが、この論争が最高潮に達したのは17世紀末、ジョン・トーランドの『神秘的でないキリスト教』の出版（1696年）が、「悪名高き不信仰者たちに対してキリスト教の正しさを証明する」ボイル講義（説教）を毎年開催する必要があると教会人たちに思い知らせた頃からである。最後の大きな盛り上がりは、1752年、ロード・ボリングブルックの著作の死後出版とともに到来した。オラトリオが初演された時期、すなわち1732年から52年にかけては、理神論に対してイングランド教会側が大反駁を加えた時期でもあった。この精力的な論争——この論争に加わった者たちの多くは、キリスト教の根幹が脅かされていると感じていた——を背景にしてオラトリオ台本を眺めてみると、台本は我々がかつて認識していた以上に論戦的な、より熱のこもった、より複雑なものであったように見えてくる。論争の主題、および正統派キリスト教を擁護する側の主張と並べて台本を読むと、同時代の自由主義思想に対する応答の一部であると思えるほどに、台本と擁護派との関係が密接であるように見えるのである。

理神論側は、三位一体の概念、特に父なる神の「人間的」性格および子なる神の聖性に、また聖書は神聖なる啓示の書であるという考え方に、攻撃の矛先を向けた。18世紀イングランドのプロテスタント・キリスト教界において、聖書は、真理と救いの唯一の源として絶大の地位を占めていた。そのため、ローマ教皇の権威、伝統の重視、「内なる光」による密やかな啓示などは全て否定されることとなる。神聖なる啓示の書として、聖書は自らが語る奇蹟、自らが伝える預言の成就によって、正当化された。しかし18世紀初頭の聖書批評の誕生により、聖書は直接的に神の靈感を受けて書かれたものであるという理由で長らく聖書に与え

られていた権威が、合理主義的攻撃の一斉射撃を浴びることとなった。正統派キリスト教の信者たちは聖書には理性に反することは一切含まれていないと信じている以上、自分たちの教理を擁護するにも合理的な根拠に基づいて行うことを余儀なくされた。「神学は科学にされてしまい、理路整然とした意見が受け入れられ、それに矛盾することは危険であるとばかりに奉じられているため、キリスト教の正しさを立証するという苦労は増大した⁽⁴⁾」と、アーサー・アシュリー・サイクス司祭は嘆いている。この結果、キリスト教護教論の諸書には「謎につつまれた、しかるに極めて合理的な預言の特徴」とか「神と人間のとあいだに仲保者が任命されるべきであると信じるのは不合理ではないこと」などと題された章が含まれることとなる。論戦は絶対的な決着がつくものとはなり得なかった。その当時は十分な歴史的知識が不足していたため、信じるか信じないかの問題にしかない事柄であったが、これを論じるのに両陣営ともに合理的な姿勢で臨んだからである。（この論争は今でも終結しておらず、永遠に続きそうな様相を呈している。1993年3月、英国の報道機関はミルウォーキーにあるマーケット大学〔イエズス会〕を解雇されたトーマス・トンプソン教授について伝えた。解雇の理由は『イスラエルの民の初期の歴史』を出版したことであった。旧約聖書の最初の10書およびそこに登場するアブラハム、ヤコブ、モーセ、ダビデ、ソロモンといった主要人物は架空のものであると主張したのである。ユダヤ教の指導者たちは冷静で、聖書は実証可能な証拠など必要としないと語った、と伝えられた。しかし、福音同盟会〔会員数120万〕総裁のクライヴ・カルヴァー師は闘争心をむき出しにし、問題の書物は聖書の真正性に対する攻撃における新局面を拓くものであると述べたという⁽⁶⁾。）

どうして理神論が破壊的であったかを理解するのに最も簡単で明確な方法の1つは、この論争が生み出した何百という出版物のうちの数冊を取り出し、その目次に目を向けることである。例えば以下に示すアントニー・コリンズの『キリスト教の根拠と理由に関する考察』第1部の目次の章題は、わずかに歴史的想像力を働かせる努力が為されたならば、今日の無信仰の人間でさえ驚愕させうる内容であり、1724年当時にこの書に触れたキリスト教徒の読者たちが覚えた戦慄を実感させてくれる。目次と同じく無表情で純朴ぶった冷笑的な文体の本文と格闘した読者たちの戦慄は、さらに強まったはずである。それは以下のごとき内容であっ

た。

1. キリスト教はユダヤ教に基づいていること、あるいは新約聖書は旧約に基づいていること。
2. 使徒たち〔そしてキリスト〕は旧約聖書によってキリスト教を打ち立て、その真正性の証明を行なっていること。
3. 旧約聖書がキリスト教徒の正典であること〔そして新約聖書は使徒的權威を有しないこと〕。
4. 新しい啓示が先行する啓示に立脚するのは普通かつ必要な方法論であるということ。
5. 旧約聖書によるキリスト教の主要な証明は新約聖書において使徒たちが主張したものであること。
6. もしこれらの証明が有効であるならば、キリスト教は真実の基盤の上に磐石に確立されているということ。
7. もしこれらの証明が無効であるならば、キリスト教は虚偽であること。

続いてコリントは、旧約聖書の預言は寓喩的にしかイエスに当てはめることができず、したがって証明とはならないと論じて、キリスト教の「これらの証明」は確かに無効であることを仄めかす。さらにコリントは次のように主張した——すなわち、キリスト教の啓示の全ては旧約聖書に包含されているのであって新約にではない、旧約聖書の文書は伝播の過程で損なわれてしまったために信頼できない、七十人訳の訳者たちは無能であった、旧新約両聖書は互いに調和し合っていない、と。

この理論の組み立てを見ると、キリスト教の啓示を擁護しようとする者たちが再三にわたってモーセの律法と旧約聖書の預言の正当性を主張しなくなった理由が、容易に理解できる。そしてこの点こそが、理神論論争がオラトリオ研究者の大きな興味をそそるのである。この論争は一筋縄では捉えられないものであった。これに関わった著者たちの論点は実に多岐にわたっていたし、その真剣さの度合いにおいても様々に異なっていたのである。

理神論者のほとんどは反キリスト教ではなく、啓示を否定したわけではなかったのであるが、彼らが啓示を^{アレゴリー}寓喩として再定義したこと、自然法の「再公布」として捉えたこと、さらにはもちろんコリンズのような者が過激な挑発を行なったことによって、伝統的キリスト教の擁護者たちが大挙して論争に参戦することとなった。この論争に関して我々が留意すべき要点は次のとおりである。すなわち、この論争は一般読書層の極めて大きな関心を集めた、旧約聖書に焦点を当てて戦わされた、オラトリオ台本に反映されている、という点である。

ジョン・リーランドの『前世紀および今世紀においてイングランドに現れたる主要な理神論作家に関する管見』（1754年、第3版1757年）は、この論争が決して神学上の単なる枝葉末節の問題ではなかったことを示している。周知度および注目度の点から言うと、あるいは20世紀後半における地球温暖化やファシズム再燃といった話題にも匹敵するかもしれない。コリンズは『キリスト教の根拠』に対して3年間に35もの反論が出たと得意がっている。『マンズリー・クロニクル』誌の1728年8月の図書目録は、過去7カ月のあいだにたった1冊の理神論の小冊子に関連して出版された19冊の書物の名を挙げている。また1729年11月の目録に載っている23冊の神学書のうちの11冊までもが、この論争におけるいずれか1つの要素のみに絞って論じたものである。論戦は専門的な小冊子や大著においてだけでなく、大衆的な月刊誌においても繰り広げられた。例えば、エフタが自分の娘を生贄に献げるのを神が許したという問題——この点は2人のオラトリオ台本作家が取り上げているが、そのうちの1人はヘンデルのために書いている（本書第14章を参照）——は、1734年4月の『ジェントルマンズ・マガジン』誌上（615頁）で念入りに検討されている。また、『ミスツ・ウィークリー・ジャーナル』はキリスト教の神秘と聖書の解釈をめぐる『インディペンデント・ホウィッグ』誌に異議を唱えている。無数の説教が行われ、この論争は読み書きのできない人々も注目するところとなった。卓越したボイル連続講義は1691年にロバート・ボイルによって創設されたもので、18世紀前半を通じて行われ出版され続けたものであるが、毎年の講演者には「悪名高き不信仰者たち、すなわち無神論者、理神論者、ユダヤ人、マホメット教徒に対してキリスト教の正しさを証明する」講義を8回行うことが求められていた。1737年にはそれらの講義の簡約版が4巻にまで達している。⁽⁸⁾

ヘンデルのオラトリオ台本作家のうち、ミラーとモレールの2人は聖職者であり、ジェネズは伝道に熱意を持つ学者肌のキリスト者であった。さらにハンフリーズは、浩瀚な3巻本の聖書注釈書を物して、いかさまの作り話であるという嫌疑から聖書を擁護する序文を付している。しかし、たとえそのような立場の人間でなかったとしても、旧約聖書について量的にも質的にも極めて激しい議論が戦わされた時期である18世紀中葉の数十年間において、読書人であって理神論論争を知らないということはありません。この論争は不信仰の広がりに対する、より一般的で、かつ執拗に喧伝された懸念へと吸収されていったからである。ヘンデル本人も、台本作家たちから、あるいは身の回りの人々との会話から、これらの問題について聞き及んでいなかったはずはない。近しい友人の1人から詳しく聞いていたのではないだろうか。その友人とは、ヘンデルの礼讃者ペンダーヴズ夫人とのちに結婚することになるパトリック・ディレイニー博士である。博士は宗教の擁護に寄与した主要人物であった。彼が1732年に出版した論評『グレート・ブリテンにおける学問と宗教と不信仰の現状。今日における趣味の墮落および不信仰の広がり^{テイスト}の原因の探求ならびに論究』は、宗教に対する一般信徒の無関心の原因を合理的な聖書分析に帰している。そのような分析のせいで、大衆にとって聖書は、他のあらゆる文書と同じく客観的な扱いが可能な諸文書を集成したものになり下がってしまった、というわけである。1740年から42年にかけて彼は、ダビデの統治に関する2巻本の大著を出版したが、この主題はダビデ王の道徳的・政治的な名声をめぐる論争の中核を成すものなのであった（この書はダビデとサウルおよびヨナタンとの関係も扱っている。1739年に初演されたジェネズによるオラトリオ台本の素材である⁽⁹⁾）。興味深いのは、英国における不信仰の増加に対するディレイニー博士の遺憾が、何にもまして、宗教的真理は感動的に伝えられなければならないという願望によって表現されている点である。芸術の改良者たちと同じくディレイニーは、説得的で情緒的で崇高な修辞法によって言説が快活なものとなること——彼の場合それには「敬虔の熱意、善意の熱心、キリスト教の愛の熱情」を伴う——を望んでいる⁽¹⁰⁾。ディレイニー夫妻がヘンデルのオラトリオの熱烈な信奉者であったのも道理である。

理神論論争とオラトリオ台本

理神論論争は聖書に、特に旧約聖書に、とりわけ本文の細部に注目の光を当てた。キリスト教の擁護者たちが自分たちの聖なる本を擁護し、彼らの論敵がそれを貶めようとすることで、数多の聖書批評の書が生み出された。両陣営とも、各々の目的のために、旧約聖書の登場人物たちの生き生きとした感情を強調し、その語りの劇的な性質を力説し、その修辞の力強さを言い立てた。ディレイニーはジェネンズとヘンデルがそうしたように感情的かつ劇的にダビデとサウルとヨナタンの話を物語り、自らが典拠とした聖書箇所⁽¹⁾に記されているそれぞれの出来事に相応しい情緒を表した。他方トーマス・モーガンは、旧約聖書を断固として虚構の世界へ引き下げようとして、その「詩的な美しさと劇的な描写」を誉めそやし、国を挙げてホメロスを神話化しようとする⁽²⁾ことと並べ立てて論じている——「出エジプトおよびカナン征服の出来事は、ホメロスの時代より600年ほど前に起こったことであるが、全く同じようなオラトリオ風かつ劇的な手法で書き記されている」⁽³⁾。綿密な検討によって、また自由主義的な批評によって、聖書は劇として取り扱われることが可能となったのである。

キリスト教を世界の宗教のなかの1つにすぎないものとし、それによってキリスト教の服従を迫る力に歯止めをかけようとして、理神論者たちはキリスト教が「単なる」民族宗教の1つ——すなわち、旧約聖書のユダヤ民族——に端を発していることを強調した。この影響で神とイスラエルとの契約に光が当たることとなり、その結果、この契約がオラトリオ台本の中心的な主題となった（本書第10章を参照）。神学的な見地に立って、また三位一体および贖いという根本的な教義を排除してしまおうとする試みの一環として、理神論者たちはキリストの教えがモーセの律法に基づくものであることを指摘し、両者間の相似点を明らかにした。この場合もやはり、その影響として、敬虔なキリスト教徒にとっても懐疑論者にとっても、ユダヤ教とキリスト教の結びつきの密接性が強調されることとなり、旧約聖書に注目が集まることとなった。

三位一体の概念に疑問を投げかけること（そして、これを突き崩そうとすること）には、必然的に、イエスはメシアであるという主張に疑問を呈することを伴うが、それをするに際して理神論は、その主張の拠り所の1つを攻撃した。聖書

で報告されている奇蹟である。理神論者たちは、概してイエス本人が行なった奇蹟そのものに疑義を呈して反感を買うことは避け、伝統的にキリストの「予型」（予兆、前兆）であると見なされてきた旧約聖書中の人物によって為された奇蹟を合理的に説明することによって、奇蹟を信じる心を揺るがそうとした。論争家たちが特に好んで取り上げた奇蹟でオラトリオ台本の題材ともなっているものには、エジプトにおけるモーセの奇蹟および紅海渡渉（《エジプトのイスラエル人》）、ヨルダン川渡渉および太陽と月の停止（《ヨシュア》）、サムソンの驚くべき偉業（《サムソン》）などがある（詳しくは本書第9章を参照されたい）。

正統派キリスト教信徒による同時代の聖書注釈書は、奇蹟的な出来事を神秘的でありつつも同時に説明可能なものとして提示しようとするに際して合理主義的立場が必然的に抱えることになる問題点を考察している。イスラエルの民を扱うオラトリオの台本作家たちが試みたことも、両方を行うことであった。つまり、神の介入を主張しつつも合理的な説明（「第二原因」）をも与えたのである。唯一《エジプトのイスラエル人》だけが、繰り返し起こった、人間の働きによらない、全く奇蹟的な神助の顕れ（エジプトに疫害が発生したこと、紅海の水が左右に割れて道が出来たこと、エジプト軍の追っ手が紅海に溺れたこと）のみを描いている。この点に関連して言うと、出エジプトの物語が贖罪の1つの予型として解釈されたのも、やはりまた順当なことであった。だからこそ祈祷書は、創世記の14章、つまりモーセに導かれてイスラエルの民がエジプトから脱出する箇所を、復活日の日曜日に読むように指定しているのである。ドナルド・バロウズが指摘しているように、ヘンデルが上演した《エジプトのイスラエル人》の4回の公演は、すべて復活日前の何週間かのあいだに開催されている。⁽¹²⁾（このことは《エジプトのイスラエル人》の台本がジェネンズの手になるものである可能性を強めている。《メサイア》の場合も同様の状況だからである。両作品とも、伝統的に行われてきたキリストによる救いと旧約聖書の聖句との結合を拠り所とした作品であり、礼拝用式文の一部となっている聖句を多用し、受難節における上演を目論んで書かれたものということになるからである。）

しかし、ほかのオラトリオ台本は、同時代の多くのキリスト教擁護論と同じく、片方だけに偏ることを避けている。モレールの《ユダス・マカベウス》第2部には、下に引用するようなユダスによる訓戒があるけれども、キュロスは神が与え

た夢に助けられつつも理知的な戦略をもってバビロンを征服するし、イエフタはケルビム 智天使とセラフィム 熾天使の助けを受けはするが卓越した将軍としての手腕に恵まれてもいるし、ヨシュアの部下たちは太陽の動きが止まるという奇蹟に助けられはするものの勇氣を持ち合わせてもいるのである。

栄光とあらゆる讃美とが天に献げられるように。

あなたがたの喝采を天に献げよ。

また、第二の原因を付け足してもならない――

かつてあなたがたの父祖たちがミディアンにおいてそうしたように。

彼らは「神とギデオンの剣が」と言ったのである。

神こそがご自分のイスラエルのために戦い、

我々のこの奇しき救いをもたらしてくださったのだ。

奇蹟に関する正統派キリスト教の信条に帰依せよというこの明確な指示は、相手の縄張りにおいて合理主義者たちと戦わねばならないことからくる困惑を雄弁に物語っているが、このことがオラトリオ台本の中にも看取できるのは興味深い。モレールは問題点を十分に自覚しており、自著『聖なる主題に関する詩集。自作、およびアルバの司教M・ヒエロニムス・ヴィーダのラテン語からの翻訳』（1732年、第2版1736年）において、より率直に正統派側による奇蹟の立証のために身を投じたのである。「ヴィーダの第1聖歌。父なる神へ」の961行目から970行目にかけては、イスラエルの民が紅海を渡りエジプト軍が水に呑み込まれてしまう話が語られており、モレールが付した広範な注は（裏付けとなる記事の参照指示を多数掲げつつ）、海が二つに割れたのはまぎれもなく奇蹟であり、イスラエルの民が無事に渡りきったことは、神の力、神の正義、「そしてご自分の民に対する神の恵みとまこと真実」との証明であった、と主張している。971行目から979行目はエリコの崩落を描いているが、注はさらに広範になっており神の力に対する崇敬を促している。980行目から985行目はイスラエルの民に砂漠で食糧と水が与えられる一件を扱っており、その注では旧約聖書中の同種の奇蹟への相互参照指示がなされている。986行目から995行目まではヨシュアのために太陽が動きを止めたという出来事についてであるが、これについてモレールが施した（ページの3分の

2にもおよぶ)注でも、その奇蹟性が主張されている——「あらゆる人間的信念を放棄し、我々の判断力の自明性を拒絶しないかぎり、我々はこれを疑うことなどできない」と。以上の点から、また《エフタ》台本の中に「第二原因」を提示したことからも、モレールは反理神論の著作活動の本流にいたことになる。例えばデイヴィッド・コリアーの『聖なる書の解釈。あるいは、聖書の有益な読みおよび徹底的な理解のための実用的入門』は、口絵に「イスラエルの子らがエジプトを逃れ、紅海を渡り、荒野を通してカナンすなわち聖なる土地へ至る旅」の地図を掲げているが、これは紅海を通っての約17マイルの行程を示している。ヨシュア記の歴史からエリコの壁の崩落は奇蹟であったと推論し、以下のように述べている。

それは神の全能の力を明らかにするためであり、民を勇気づけるためであったのであるが、残りの部分は彼らが軍略と戦闘とによって攻略することを神はよしとされ……そのことによって我々に以下のことを教えておられる。すなわち、目的を定められた方は、その目的を達成するための手段の大部分も企図されたということである。よって我々は、通例、法に適った相応しい手段を求めることなくして結末を想定するべきではないのである。⁽¹³⁾

キリスト教擁護に対するモレールの熱の入れようは、ロックの『人間理解論』の注解書によって、愛しさを覚えるほどまでに示されている。彼が記した参考文献の半数以上は哲学書ではなく宗教に関係するものであり、そのなかで最も多くを占めるのが理神論に刺激されて行われた議論に関わっているのである(本章の冒頭に掲げた引用句も参照されたい。⁽¹⁴⁾)

理神論者たちは、旧約聖書のメシア預言およびメシアが行うことになる奇蹟の数々をイエスに当てはめて考えることを否定することによって、もう一方の伝統的な「証拠」をも退けようとした。この影響で、またしても、旧約聖書に注目が集まることとなる。またこれに促されて、キリスト教の啓示が正しいこと、そしてそれが福音書と一致していることを証明しようとする努力が新たに生み出されることになる。オラトリオ台本の中に見出される理神論争論のこの部分の痕跡は、

特に驚くべきものである。

《メサイア》は台本作家が聖書の預言に肩入れした最も明白な事例である。イエスこそがメシアであるという主張を「証明」するにしても「論駁」するにしても、伝統的にイエスがメシアであることを告げていると捉えられてきた聖句について、浩瀚かつ詳細に検討することが目的のための手段となった。（ジェネンズの手に成るものと思われる）《エジプトのイスラエル人》の台本においてエジプトおよび紅海における奇蹟によって示されたモーセの聖なる働きを跡付けたのち、ジェネンズは大胆にも《メサイア》によって問題の核心に迫ったわけであるが、その青写真の着想は同時代の無数の刊行物から得たものであった。両陣営においても、成就した預言がメシアの最も重要な証拠になると考えられていた。アーサー・アシュリー・サイクスはその著書『キリスト教の真理論』の冒頭の頁において、次のように述べている——「キリスト教というものはナザレのイエスを起源とし、明らかに旧約聖書を基盤として成り立っているのであるから、その真理を吟味するには、予言された内容とその結果およびその後の出来事とを比較する以上に真つ当な方法はありません」。これこそがジェネンズが行なったことであって、彼は当時の表形式の資料から自らの聖句集を作成したのである。そのような資料には、旧約聖書の預言と新約聖書におけるその成就との対比、「4福音書間の調和」、および旧約と新約の聖句間に見られる実際の文言上の対応関係が示されていた。理神論者たちは、新約聖書における旧約からの引用文は我々が有している旧約の文言とは必ずしも一致していないことを指摘していた。ジョゼフ・ハレット（年少）は以下のように報告している。

このことを考察したことによって、我々の聖なる宗教に対する無分別な敵対者たちは勝ち誇っている。まるで、新旧約の両聖書間のこれらの相違が両者の、あるいは少なくとも新約聖書の、真実性を完全に打ち砕いてしまうことになるかのように。この点に関する彼らの慢心を叩き潰すため、また我々の祝福された救世主およびその弟子たちがあのようなやり方で旧約聖書を引用したことの正当性を立証するため、博学聡明なるホイストン氏はその卓越した著書『旧約聖書の真正なる本文の復元に向けて』において、旧約から引用された新約聖書中の文言は、もともと

は、新約で引用されたのと同じ言葉で旧約において表現されていたことを、十全に示してくれた。

ハレットはさらに続けて、ある著作の計画について述べている。「300に近い引用句のうち、圧倒的大部分は正確であるのに対して」わずかに「20ほどが相違している」ことを示す著作である。⁽¹⁵⁾ ジェネンズの台本を構成する80の聖句のうち少なくとも17、数えようによっては51もの句が、新約聖書において意識的に引用されている旧約の言葉、あるいは旧約の聖句の反響^{エコー}のいずれかである（例えば、冒頭のレチタティーヴォで歌われるイザヤ書60章3節の言葉は、マタイによる福音書3章3節、マルコによる福音書1章3節、ルカによる福音書3章4節、ヨハネによる福音書1章23節で引用されている）。キリスト教の真正性の証明を劇場に持ち込むという、ジェネンズが進んで自らに課した課題は、大胆なまでに独創的な試みであった。しかし素材の選択に関しては、外的影響を大きく受けていたのである。

もちろんこの台本には、それほど論争の火種とはならないような典拠もあった。ジェネンズが選んだ歌詞のほぼ全ては、イングランド教会祈祷書の中にも見出せるのである。⁽¹⁶⁾ さらにまた、ジェネンズはヘンデルからある伝統について聞き及んでいた可能性もある。それはヘンデルがローマに滞在していた頃に開花し、《メサイア》制作の前年に終焉を迎えた伝統的催しである。ローマ教皇の宮廷においては、活人画を使ったキリスト降誕のカンタータが上演されていたのである。

《メサイア》研究者には必読となっている論文においてキャロリン・ジャントゥルコが明らかにしたように、このときのカンタータにはキリストに関する旧約聖書の預言が含まれることもあった。例えば1705年（ヘンデルのローマ到着2年前）のカンタータは、シルヴィオ・スタンピリャ（アルカディア協会の創設メンバーで、ヘンデルは彼のために曲を作っている）による歌詞、アレッシンドロ・スカラルラッティ（ヘンデルもその後そうしたように、オットボー二枢機卿に仕えた）による曲が付いていたが、この作品にはアブラハム、ダニエル、エゼキエル、エレミヤ、イザヤが登場している。⁽¹⁷⁾（ジェネンズ自身も、のちにスカラルラッティその他のローマの作曲家による旧約聖書カンタータの手稿を入手している。）旧約聖書におけるキリスト教の救いの予型もまた、クリスマス向けカンタータの主題

にされていた。これはジャントゥルコが報告しているあるカンタータから判断できることで、この曲（〈破滅をもたらすこの流れより〉、1736年）は紅海渡渉に関わるもののようで、モーセの両親、ミリアム、ファラオの娘が登場している〔訳注1〕。最後に、これはよく知られていることであるが、ジェネズスの主題はイングランドにおいてさえ文学創作の主題として独創的なものではなかった（本書第4章を参照）。しかしながら、彼の手法には既存の文学作品を雛型としている点はほとんどなく、ほぼすべてを同時代の宗教論争に負っているのである。

旧約と新約の聖句を繋ぎ合わせてできた台本の中には、欄外中で並行聖句を列挙している注解付き聖書さえあればジェネズが作り得た歌詞も含まれる。しかし彼が用いた聖句は、キリストの本質と使命とに関わる数多の同時代の刊行物において、攻撃するためであれ擁護するためであれ、その論拠となったものでもあった。ジェネズは聖書批評を学究的に読んだ人物であり、その広汎な蔵書にはとりわけ当時の神学関連書が豊富に含まれていた⁽¹⁸⁾。例えば、バースとウェルズの主教リチャード・キダーによる『キリスト教真理の証明であるところのメシアの業』（第2版、1726年）が所蔵されていたが、これはメシア論争における主要な著作物の1つであり、その目次を眺めてみると、《メサイア》台本の青写真であったかのように思えるほどである。ジェネズスの台本を構成する80の聖句のうちの41までが、キダーによっても引用されているのである。ジェネズがどの程度までメシア論争においてよく利用された聖句を選んでいるかは、他の主要な理神論攻撃の刊行物を見ても明白である。『キリスト教の根拠』（1729年）においてジョン・エンティックは、247頁のうちの96頁を費やして「すべてメシアに関する旧約と新約の」並行記事の対照表を作成しており、旧約聖書の欄の表題は「預言」、新約聖書の表題は「成就」となっているのであるが、エンティックは《メサイア》の歌詞となっている聖句のうちの38を引用している。また、ウィリアム・ハリスは『全旧約聖書中における主要なメシア像についての実用的論考』（1724年）において30、トーマス・スタックハウスは『思弁的・実践的神学大全』（1729年。第2版、1734年）において35、サミュエル・パーヴィッシュは『ユダヤ教およびキリスト教の啓示の探求——ユダヤ教のメシアに関わる全ての預言を考察してイエス・キリストの人格・性格ならびに福音書の時代と比較。聖書の正典の權威について。奇蹟の本質とその利用について。その他』（1739年）において28を、そ

れぞれ引用している。逆もまた同様で、アントニー・コリンズはその著書『文字どおりに預言を理解することについての論考』（1727年）でかなりの紙数（39－64頁）を割き、ギリシャ・ローマの古典、特にウェルギリウスの『牧歌』第4歌からメシア到来の期待を読み取ろうとする教会の試みを嘲笑っているが、『牧歌』第4歌はジェネンズが選んだ題辞の1つの出典となっている。ジェネンズが付けた《メサイア》という題名さえもが、この論争に端を発している。この論争における中心的な命題であり、言葉を尽くして常に発せられた問いは、「イエスはメシアであったのか」だったからである。さらに、彼がテモテの手紙一から採った題辞および彼の台本は、キリスト教の神秘とはまさしく神秘的なのである、と大胆に宣言しているが、ちょうどその当時は正統派擁護の陣営があくまでも合理主義的な論調を崩すまいとする態度を緩め始めていた時期であった。これは理神論陣営からの最初期の主要な一撃であったトーランドの『神秘的でないキリスト教』に敢然と対抗するものであった。トーランドはテモテの手紙一からのこの聖句を、新約聖書において「神秘とは[ただ単に]福音あるいはキリスト教の読み換えのことにすぎない」と主張することによってキリスト教から神秘の要素を排除しようとして引いた諸々の聖句の、その最たるものとして引用していたのである。⁽¹⁹⁾ジェネンズは、ホールズワース宛の手紙の言葉からもわかるように、より文字通りに「神秘」を読むことを是とした。ウェルギリウスやポウプの解り難さに不平を鳴らしつつ、次のように語っている——「我々と同じ人間ならば、我々が理解できるように、しかも容易に理解できるように、語るべきでしょう」が「聖書の場合は同じ不服を受け付けません。聖書はより優れた権威に立脚しているのですから。我々の創造主は、ご自分の望まれる言葉で我々に語りかけ、我々の理解を超越する事物をもって我々の高慢を挫く権威をお持ちなのです」。⁽²⁰⁾ジェネンズは、蔓延しつつあった宗教軽視の傾向と戦うために全誌面を割いていた雑誌『ウィークリー・ミセリニー』（1732－41年）からほぼそのまま引用している。⁽²¹⁾

実際のところ、預言者の言葉から成り立っていて（しばしば指摘されてきたように）キリストの生涯と業績とがほぼ全編にわたって仄めかしによって提示されているという点において、《メサイア》の歌詞の多くの部分は、「神秘的」であり「我々の理解を超越する」ものである。イエスという名前はただ1度しか登場せず、しかもそれは作品の終演間際になってから現れる——イエスこそがメシア

であるという信仰を表明する、実に印象的な修辭的技巧である。台本を構成する80の聖句のうち、福音書の中だけに見られる聖句は10句のみであり、その10句のうちの6句だけが語りで、それらは天使の軍勢による宣告を伝えている。ということで例えば、キリストの受難が描写されることはなく、「そして彼が受けた傷痕によって我々は癒されたのである」という歌詞において人類救済の計画の全貌が浮かび上がるようになっている。ジェネズは預言の証明だけをしているわけではなく、イエスの生涯における神秘的要素についても言及している。キリストの受肉と復活、キリストによる癒しの業、人類の回心と救済もみな含まれているのである。しかし、信仰の確信をもってジェネズは、三位一体の概念を定義したり説明したりしようとする罣に嵌ることは避けている。この概念については最も熱烈な理神論側の反論が極めて成功裡に狙い撃ちにしていたのである。代わりにジェネズは「証拠」をもって教義を語らしめ、ほかのどの仲間のキリスト者が為したよりも効果的かつ永続的な成果を収めたのである。

ジェネズによる別の台本、《ベルシャザール》の台本には、さらにあからさまな旧約聖書の預言の擁護が含まれている。だが、ここでの預言はメシアの到来に関わるものではなく、ユダヤ人の解放および神殿の再建についての預言である。これらの預言は、台本が率直に語っているように、確かに成就したものなのであった。このような手法によってジェネズは、聖書の真正性に対する正統派キリスト教側の主張の範囲に制限を加えつつも、同時にまた、預言がある事例においてかくも立派に成就するのであれば他のどのような場面においても信じ得るものであると暗示しているかのようである。この主張は台本中で中心的な役割を担う預言者によって補強されている。当該の預言の言葉を正しく解き明かす預言者、ダニエルである。彼はキリストに関する予言を特に強く連想させる人物であった。ダニエルに帰せられているメシア預言は、何世紀にもわたって熱心な神学的議論の主題となってきたおり、正統派によるキリスト教擁護にとって決定的に重要なものであった。1700年から1760年にかけて、ダニエルの預言に関して12冊を超える書籍が刊行されており、ニュートンによる『ダニエル書の預言に関する考察』⁽²²⁾はとりわけ有名である。ジェネズが作った劇全体を通して、神聖な言葉はそれ自体が主要な登場人物であるかのようであり、ダニエルと関連づけて用いられているように見える。すなわち、幕開けの第1幕第3場（「目の前にイザヤとエレ

ミヤの預言書を広げるダニエル。その他のユダヤ人。ダニエル『ああ、神聖なる真の神託の言葉たちよ！』）から、劇が最高潮に達してダニエルが勝利者キュロスにその勝利によって成就したばかりのイザヤ書の預言を示し、その預言の正しさに感銘を受けたキュロスがユダヤ人の神を礼拝し、預言の残りの部分——つまりユダヤ人の解放とエルサレムの再建——の成就に着手するという場面に到るまでの、初めから終わりまでである。⁽²³⁾

聖書の預言の正しさをキュロスの来歴において裏づけるというジェネンズの主題は、現代の聴き手にはあまり強烈な印象を与えないかもしれない。しかしこれは、多くの反理神論的な文書において論じられてきていたものであり、同時代の観客に対しては、ジェネンズはただ仄めかして想起させるだけでよかった。ジェネンズが《ベルシャザール》台本のための主要かつ直接的な典拠としてチャールズ・ロリンの著書、(様々な国民があるなかで、とりわけ) ペルシャ人について論じた『古代史』(第2版、1738-40年)を用いていることは明白であるが、彼はその中でその主題が詳説されるのを目にしていたであろう。この定評ある著作は19世紀になっても版を重ねたほどで、ジェネンズの蔵書中に含まれていた。この中では、ダニエル書、イザヤ書、エレミヤ書、クセノフォン、ヘロドトスからの素材が結合して劇的な物語を形成している。ジェネンズも同じ典拠から同じ素材を用いて自らの台本を作っているのである。ロリンの第4書第1章第2条は「キュロスによるバビロンの包囲と陥落^{ナラティヴ}の物語^{ヒストリー}」に関わるものであるが、そのうちの第1節「聖書中の様々な箇所^{ナラティヴ}に記されている、バビロンの包囲および陥落に関わる主要状況についての予言」には以下が含まれている——「神の民に対する善と恵みに満ちた神の計画を実行に移すための器として、神の摂理が用いることになるキュロスの名は、その誕生の2百年以上も前に聖書中に記されている……。神は気高く素晴らしい御言葉をもって宣言なさったのである。神ご自身が彼の先導役となろう、と。彼が行う遠征のすべてにおいて、神は彼の手を取って導き、地上のあらゆる君主たちを彼の前に屈服させよう、と。『主は、主が油を注がれた者キュロスに対してこう言われる』」。ここでロリンはイザヤ書第45章の第1節から第4節を引いているのであるが、同じ章の第1節から第6節までの聖句を、《ベルシャザール》第1幕第3場のレチタティーヴォの歌詞としてジェネンズはダニエルに歌わせている(歌詞冊子には傍注で出典が示されている)。ジェネン

ズは軽々に人を褒めそやすような人物ではなかったのであるが、ある手紙の中で、ロリンの著作は「彼が分別と学識と美德の人であることを示している」⁽²⁴⁾と述べている。

旧約聖書の預言の信頼性を貶めたのちに過激な理神論者が取った手段は、旧約聖書に描かれるユダヤ教を貶めることによってキリスト教の教義を突き崩すことであった。そうするために、イスラエルの民を、その行いを、そして彼らを選び導いた神を、道徳的に劣ったものとして描いたのである。このことはニュートンの科学的発見に助長された神観と軌を一にしていた。ニュートンは、物質は無機的であり神のみが森羅万象を動かすことができると規定することによって、宇宙にとって神を根源的な存在としたのであった。自然界全体が神に依存している、と。ニュートンも教会内のその追随者たちの多くも、自分たちの新しい科学と、聖書の啓示への信仰とに、折り合いをつけることはできたのであった。全宇宙を統御する神は、キリスト再臨に際してこれを滅ぼすこともおできになる存在である、と。ニュートン学派は神意の介入ということを否定したわけではなかったし、ニュートン本人は、自らの数学的技術を駆使して聖書の預言や出来事の年代順配列、世の終わりの到来時期の算出という問題に取り組むことによって、既に示してきたとおりキリスト教の正当性の証明に精力を傾けていた。⁽²⁵⁾ところがニュートンによる諸発見の、まさにその普遍性そのものが、それらの発見が理神論者たちによって旧約聖書の神の理解に応用されると、教会に対する反発として作用してしまったのである。

諸惑星を軌道に乗せて運航させる善良なる宇宙の創造主と、たった1つの世界の片隅でかつて奴隷であった人々の群れを偏愛する、復讐心に満ちた狭量な民族神とを、同一視などできようか——この点において自由主義思想は、最良の人道主義的意図を持った多くの著述家たちを取り込んだ。すなわち、狭量で帝国主義的なイスラエルの民は、キリスト教教義を攻撃するために使えるだけでなく、宗教的・政治的な寛容と倫理的向上心とを学ぶための教訓としても役立ったわけである。この結果、またしても、イスラエルの歴史の道徳的妥当性を叫ぶ言説、特定の民に肩入れをする神の倫理的不当性を免ずる言説が引き出されることとなった。ここで問題となった主要な聖書箇所は、ヘンデルのオラトリオを研究する者にとって興味深いものである。すなわち、アマレク人との戦い（《サウル》）、

カナン人の滅亡（《ヨシュア》）、エステルによって引き起こされた現地人の大征伐、デボラが誘発したヤエルによるシセラの殺害、エフタの娘の不相応な苦しみ、ヨセフやダビデやソロモンの経歴の道徳的・宗教的問題性などであり、これらは全てオラトリオ台本の素材となっている（詳しくは本書第2部において論じる）。さらに、旧約聖書のユダヤ人に対する理神論陣営からの批判——すなわち、ユダヤ人は粗野で野蛮で御し難く、自国および他国の民の血にまみれているという批判（これらはトーマス・モーガンが使った言葉であるが、「神がユダヤ人をお選びなるとは摩訶不思議」〔訳注2〕こそは、理神論側の用いた「主題曲」の1つであった）——に依って、擁護する側は、洗練された感受性が要求しうる、啓発された時代の善行のための導きをも全て含むものとしてモーセの律法を描いた。例えばフランシス・ウェバーは、1737年にオックスフォード大学で説教を行い、（聖書の言葉に言及しつつ）次のように指摘した。すなわち、旧約聖書が教えたのは「善行、慈愛、そして全ての社会的美德の基本原則である……。外来者に対する歓待の心、貧しい人に惜しみなく与える親切心、敵に対する寛大さ、あらゆる隣人たちへの友好的気持ち……。これらは全て間違いなく平和と調和と友愛を推進すると見込まれるものである」⁽²⁶⁾と。ここにこそ、オラトリオ台本の中でイスラエルの民を、観客が喜んで自己と重ね合わせることができると国民として描写することの下地があったのである（詳しくは本書第10章を参照されたい）。

ニュートンの思想は、啓示を貶めるためだけに利用されたわけではない。その逆に、啓示を擁護しようと設立されたボイル講義のうちの多くにとっての発奮材料にもなった。⁽²⁷⁾ リチャード・ベントリーおよびサミュエル・クラークによる講義（1692年および1704－5年）は、ニュートンの影響下で執筆されたもので、人類に干渉してくる神の存在を演繹の方法で論証したものである。しかしながら、のちの講師たちは経験による証拠、とりわけ自然界の証拠に基づいて自らの主張を展開する傾向があり、啓示の神をその創造の秩序のうちに跡づけて聖書と自然史とを調和させる説教が次から次へと生まれている。これらは、重ねた版の数から見て、多くの読者を得ていたものと思われる。例えば、ウィリアム・デラムによる1711年と1712年の連続講義『自然神学、あるいは創造の御業による神の存在および特性の論証』は1745年までに11版が出ている。ボイル講義の講師たちによる素晴らしき世界の創造主としての神の賞揚は、容易に詩人たちが取り上げるとこ

ろとなった。アディソンによる讃美歌「高き大空」は、しばしば引き合いに出される例である。この文脈ではそれほど気づかれることはないが、全く同様の言葉を使って神を讃美するオラトリオの諸合唱も、同じ知的主張、同じ神学的意図を反映している。さらに言う合唱は、この意図を果たすべく、キリスト教の旧約聖書の先祖たちは狭量な民族主義者であるとする自由主義思想家たちの攻撃に逆襲している。「あの恐れ多き勅令により／調和に身を包んだあの渾沌は」（《デボラ》第1部第1場）、「昇りゆく世界をエホバは栄光で飾り」および「我らが拠り頼む強大なる力は」（《アタリア》第1部第1場、第2部第1場）、「エホバ、主よ、その贖いの座から」（《ヨセフとその兄弟》最終合唱）といった合唱曲には、被創造物が調和に満ちて秩序立っていることを証拠にして善なる神が存在すること示そうとする当時の考え方がこだましているが、このような合唱においては、イスラエルの神が全世界の神となっているのである。

モーセの律法もまた、その由来のゆえに攻撃を受けた。理神論者たちは、起源的・内容的にはエジプトのものであることを理由に、モーセの律法は（ということは暗にキリスト教の教義は）神聖なる権威を有していないと論じたのである。主としてこの批判は、聖職者たちを攻撃する目的でなされた。つまり、キリスト教の聖職者たちを中傷するために、ユダヤ教の祭司制がエジプトの（腐敗した）制度から派生したものであることを示したわけである。それに対して正統派キリスト教の側が行なったのは、ユダヤ教の律法が神によって与えられたものであるということを再強調することであり、やはりまた、旧約聖書に記されている内容が正当化された。この論争のこの部分は敷衍され、当代の教会の聖職位階制の改革を求める密やかならぬ声として、モーセが創始した祭司職の品性にも疑問が投げかけられたが、これもやはり聖職者攻撃が目的であった。これに対する反応も、やはりまた、そこに記されている祭司制を是認することによる旧約聖書の正当化であった。（聖職擁護のためにオラトリオ台本が果たした役割については、本書第13章で論じる。）

バトラーによる『宗教の類比、自然宗教と啓示宗教』が1736年に出版されると、キリスト教の啓示は、これを攻撃する者たちに対して合理的な圧勝を収めたかのように思われた。ところが、トーマス・モーガンの3巻本『道徳哲学者』（1737－40年）によって、擁護側はまたしても戦いの場に引きずり出された。そして、モー

ガンの論難に対する直接的な反論をオラトリオ台本の中から引くことは可能である（ほとんどの論難はそれ以前から挙がっていたものであるが、モーガンはこれらを異常なほどの執念をもって再述したのである）。台本が圧制者によるイスラエルの民の迫害を執拗に描いているのは、モーガンがイスラエル人を他国民に対して無闇に戦いを仕掛け残虐行為を働く民として強調したことの裏返しである。意気揚々たる勝利の結末において、またその勝利に達するための奮闘の多くの局面において、台本が宗教的・政治的自由の回復を強調しているのは、自らも奴隷になりながら他を奴隷にしようとするイスラエル人の性格をモーガンがことさらに言い立てることへの反駁である。神助によってイスラエルが勝利を達成するという主題を台本は常に扱っているが、これは、自分たちは特別な神慮のうちにあるというイスラエルの主張が間違いであることは事の成り行きが示しているとするモーガンの執拗な主張に対する反論である。オラトリオに描かれるイスラエルの民は直接的に神に訴えかけるが、これは、人々と神との間に腐敗した祭司階級が割って入っているというモーガンの論点を殺ぐものである。台本中、イスラエルの民は宇宙の創造者であり支配者である神に対して多くの讃歌を献げるが、これは、彼らが自分たちの神を一地域の守護神と捉えていたとモーガンが強調することに対する反証である。そして、合唱が発する声の統制のとれた複雑さが、イスラエルの民衆は粗野で無知蒙昧で迷信的な烏合の衆であるとするモーガンの見解を打ち消しているのである。

このような符合の例はまだまだ挙げ続けることができよう（具体例のいくつかについては本書第2部でさらに詳しく論じる）。この論争の影響は、イスラエルの民を扱ったオラトリオ台本以外でも、あるいはまた聖書に基づかない台本においてさえ、見てとることができる。モーガンは「啓示は我々の理解できる地平にまで引き下ろされるべきである」と要求したが、『メサイア』はこれを取り上げて求めに応じている。モレールは『テオドーラ』の中心にキリストの奇蹟にまつわる記述を据えている（〈彼は麗しき若者を見た〉）のだが、物語の展開との関連性が薄いかに見えるこの部分も、キリストの神性の証明としての奇蹟をめぐる論争を知っていれば、その重要性が見えてくる。要するに、オラトリオの内容と自由思想家たちの論議との結びつきには極めて強いものがあり、したがって我々は、確信をもって、オラトリオ台本をキリスト教擁護への貢献と位置づけることがで

きる。また、現代人が聴けば最初は理解できないか困惑するかもしれないような少なからぬ問題を含む多くの主題が、実は台本作家や当時の聴衆にとっては重大問題であったことに、気づくことができるのである。

（以下、次回に続く）

注

- (1) William E. Alderman, 'Shaftesbury and the Doctrine of Moral Sense', *PMLA* 46 (1931), 1087-94; Cecil A. Moore, 'Shaftesbury and the Ethical Poets in England', *PMLA* 31 (1916), 264-325. ティロットソンの説教や、同じ考え方をした18世紀キリスト教徒たちの信仰には、とは言うものの、確固たる教義的基盤を有していた。このことを忘れずにいるためには、以下を参照されたい。Roger L. Emerson, 'Latitudinarianism and the English Deists', in *Deism, Masonry and the Enlightenment: Essays honoring Alfred Owen Aldridge*, ed. J. A. Leo Lemay (Newark, NJ, 1987), pp. 19-48.
- (2) Roland N. Stromberg, *Religious Liberalism in Eighteenth-Century England* (1954); John Redwood, *Reason, Ridicule and Religion: The Age of Enlightenment in England* (1976). 以下は、主だった主題のいくつかは18世紀中葉になっても論議されていた様子を明確に伝えている。Gerard Reedy, *The Bible and Reason: Anglicans and Scripture in Late Seventeenth Century England* (Philadelphia, 1985), esp. pp. 10, 15-17, 36-9, 48-57, 66-8, 87-9, 103-5, 142-3. 最も面白く読める論述は、今なお以下の書中に見られるものである（極めて合理主義者寄りの見解である）。Leslie Stephen, *History of English Thought in the Eighteenth Century* (1876, 3/1902).
- (3) この点については以下の好著が最も充実した記述を行なっている。Joseph Butler, *The Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and Course of Nature* (1736).
- (4) Arthur Ashley Sykes, *An Essay upon the Truth of the Christian Religion: wherein its Real Foundation upon the Old Testament Is Shewn. Occasioned by the Discourse [by Anthony Collins] of the Grounds and Reasons of the Christian Religion* (1725, 2/1755), preface, p. ix.
- (5) William Whiston, *The Accomplishment of Scripture Prophecies. Being Eight Sermons*

- Preach'd . . . at the Lecture founded by the hon. Robert Boyle esq.* (1706, 1708); Samuel Clarke, *A Discourse, concerning the Unchangeable Obligations of Natural Religion, and the Truth and Certainty of the Christian Religion* (1705). 以下に掲げられている書名一覧も参照されたい。Richard Watson, *Collection of Theological Tracts* (Cambridge, 1785), V, iii-viii.
- (6) *Independent on Sunday*, 28 March 1993, p. 1.
- (7) Nathaniel Mist, *A Collection of Miscellany Letters Selected out of Mist's Weekly Journal*, II (1722), pp. 89-92, 113-15, 124-8.
- (8) Gilbert Burnet (of Coggeshall), *A Defence of Natural and Revealed Religion: being an Abridgement of the Sermons Preached at the Lecture Founded by the Honourable Robert Boyle Esq* (1737). 一連の講義の題目や講師名等は以下に載せられている。John Cooke, *The Preacher's Assistant* (Oxford, 1783).
- (9) Patrick Delany, *An Historical Account of the Life and Reign of David, King of Israel* (1740-2). 詳しくは本書第13章を参照されたい。
- (10) Delany, *The Present State of Learning, Religion, and Infidelity in Great-Britain Wherein the Causes of the Present Degeneracy of Taste, and Increase of Infidelity, Are Inquir'd into, and Accounted for* (1732), pp. 6, 10.
- (11) [Thomas Morgan,] *The Moral Philosopher* (1737-40), I, 250-1.
- (12) Donald Burrows, 'Israel in Egypt', *Maryland Handel Festival Programme Booklet*, (Bethesda, 1987), p. 35.
- (13) Morell, *The Sacred Interpreter; or, A Practical Introduction towards a Beneficial Reading, and a thorough Understanding, of the Holy Bible* (1732), I, frontispiece, 241-3.
- (14) この参考文献表は、以下の書物（のケンブリッジ大学図書館に所蔵されているもの、およびレス・ロバーツの教示によれば大英図書館所蔵のものにも）の表題頁の前面に（モレールの筆跡で）手書きされている。Morell, *Notes and Annotations on Locke on the Human Understanding* (1794)。この本に関してさらに詳しくは、本書第8章「モレール」の項を参照されたい。
- (15) Joseph Hallet, jnr, *A Free and Impartial Study of the Holy Scriptures Recommended* (1729-36), I, 89-91.

- (16) この点に関しては、ある程度まで以下によって取り扱われている。Geoffrey Cuming, 'The Text of "Messiah"', *M & L* 31 (1950), 226-230.
- (17) Carolyn Gianturco, "'Cantate spirituali e morali', with a Description of the Papal Sacred Cantata Tradition for Christmas 1676-1740", *M & L* 73 (1992), 1-31. この論文は、ジャントゥルコが「ヘンデルの道徳的カンタータ」と適切な名称で呼んでいるものの研究者にとって、大いに興味深い文献でもある。
- (18) 例えば、リチャード・サイモンの草分け的な聖書批評書や、聖書の信頼性の著名な擁護者であったウースター主教エドワード・スティリングフリートの諸作などである（以下を参照。Reedy, *Bible and Reason*, pp. 39, 48-50, 103-5）。ジェネンズの蔵書について、また《メサイア》台本と彼の生涯および信条との関わりについては、以下の拙論を参照されたい。Ruth Smith, 'The Achievements of Charles Jennens (1700-1773)', *M & L* 70 (1989), 161-90. ジェネンズが「神学の偉大な学究であり、ゴブソール〔ジェネンズの邸宅〕には聖書の文言について彼が記したギリシャ語の注釈の手稿が多数残っている」ことについての、ほぼ同時代の人間による証言に関しては、以下を参照。William C. Smith, 'The Text of "Messiah"', *M & L* 31 (1950), 386-7.
- (19) John Toland, *Christianity not Mysterious: or, A Treatise shewing, that there is Nothing in the Gospel contrary to Reason, nor above it; and that no Doctrine can properly be Called a Mystery* (1696, 1702), p. 98.
- (20) J/H 15 September 1743.
- (21) 'Richard Hooker' (William Webster), *The Weekly Miscellany. Giving an Account of the Religion, Morality and Learning of the Present Times* (2/1738), I, xv-xvi, II, 36-53, 424-31.
- (22) Isaac Newton, *Observations upon the Prophecies of Daniel* (1733). ダニエルが見た幻をキリストに関する預言として読むことの正当性に関する論考の、その初期の例としてはヒエロニムスによる注釈書（407年）がある。これは、ボルフュリオス（304年頃に歿）がそのような解釈を激しく非難したことに対する論駁として書かれたものである。
- (23) マーク・ゴールディから指摘されたことであるが、ジェームズ2世はローマ・カトリックの信者でありながら、その治世の前半においてプロテスタント信者たちを保護していると思われているあいだは、新しいキュロス王（ユダヤ人たちを庇護した異教徒）と讃えられていた。ジェネンズがスチュアート王家に同情を寄せていたことを考えると、これは興味深い指摘であ

る。

- (24) J/H 10 July 1741. 「イスラエルの状況を回復する者となるべく、その誕生の百五十年以上も前から、名前をもって指名された」、預言の正当性の証明者たるキュロスの、その重要性について論じた反理神論派による他の記述については、以下を参照。Stackhouse, *Complete Body*, p. 489. また、ヘンデルの台本作家による以下の書の、イザヤ書の第64章27節および第65章第1節、エズラ記第1章第1節についての7本の稠密な相互参照欄も見られたい。Samuel Humphreys, *The Sacred Books of the Old and New Testament, Recited at Large* (1735).
- (25) 教会によるニュートン思想の吸収に関しては以下を参照。Margaret C. Jacob, *The Newtonians and the English Revolution 1689-1720* (Hassocks, Sussex, 1976).
- (26) Francis Webber, *The Jewish Dispensation Consider'd and Vindicated, with a View to the Objections of Unbelievers, and particularly of a Late Author Call'd the Moral Philosopher* (Oxford, 1737, 2/1751), pp. 42-3.
- (27) 以下を参照。Jacob, *The Newtonians*, pp. 143-200. 連続講義と同時代の科学および宗教との関係についての簡潔な説明は、以下を見られたい。James Sambrook, *The Eighteenth Century: The Intellectual and Cultural Context of English Literature, 1700-1786* (1986), pp. 29-30.

訳注

〔訳注1〕 紅海渡渉の話にファラオの娘が出てくるのが奇妙に思い、著者に問い合わせたところ、どうやらこれは著者の思い違いだったようである。この曲はおそらく、川に流された嬰兒モーセがファラオの娘に拾われる物語（出エジプト記第1－2章）を歌ったものであろうと現在では考えている、とのことである。

〔訳注2〕 著者は出典を示していないが、これはイギリスのジャーナリストWilliam Norman Ewer (1885-1976) の詩行。作者が誰であるかは知らなかったがあまりにも人口に膾炙した有名句であったため、特に作者名を調べるようなこともなく引用したそうである。

訳者付記

以上はRuth Smith, *Handel's Oratorios and Eighteenth-Century Thought* (Cambridge University Press, 1995) 第1部 'English origins of English oratorio' の第6章 "The defence of Christianity" (pp. 141-56) と、その巻末注の部分 (pp. 389-91) を試訳したものである。単なる誤植や誤記と思われるような原著の非本質的な小さな誤りは、今回も特に断ることなく改めた。

毎度毎度のことであるが、原文中の疑問点や難解な部分——と言っても、もちろんこれは著者の責任ではなく、訳者の知識不足および読解力不足に起因するものがほとんどである——については、例によって質問メールで著者をお煩わせした。ここであらためてお詫びするとともに、謝意を表しておきたい。それでもなお思わぬ不備はあるかもしれない。読者から忌憚のないご批判・ご指導を頂戴できたならば幸甚である。